

NIDF2015 - 新潟インターナショナルダンスフェスティバル／水と土の芸術祭2015

Noism0『愛と精霊の家』

特別寄稿 浦野芳子(舞踊評論家)



Photo by Kishin Shinoyama

さまざまな男性の影―幻影―が入れ替わり立ち代わり彼女の世界に現れる。それは実際に彼女がこれまでにとってきた恋愛の片鱗なのかもしれないし、もしかしたら長い時間をかけて築いたあるひとりの男性との、変化する時間の記憶の断片なのかもしれない。

いずれにしても、この女性、いや人間というものは、記憶の積み重ねにより今を生きる命、に他ならないのだ。

愛の存在感とは

愛、というものは曲者だ。

両腕に抱えきれないほどの幸福をもたらすかわりに、必ず、これ以上ない哀しみをもたらす。必ず。本気で何かを愛した経験のある人なら、きっとわかるだろう。

それは、別れ別れになる、失う、ということだ。

幸福は、すぐに日常になじんで、自分の身体の一部になってしまふ。そして、もぎ取られるようにしてそれと離別した後に、底が見えないほどの深い闇を潜えた空洞が姿を現し、その幸福がいかに自分の中の大きな割合を占めていたのかに、気づくのである。

幸福の記憶を、心のスクリーンに映し出してみたところで、目についてしまうのは互いのミステイクばかり。後悔はしても、決して癒されることなど無い。

けれども、私は信じたい。

今の私という存在の中には、愛した者との時間がぎゅっしり詰まっているのだということ。決して失ったのではなく、私が生きている限り愛も生きて行き続けるのだということ。

私の中から甦るようにして生まれ出るその者を精霊、と呼ぶことにしよう。

2015年9月4日、Noism0『愛と精霊の家』を見て、筆舌に尽くしがたい大きな感動を覚えた。素晴らしい、美しい、感極まる、心を打つ、貧困な私のボキャブラリーでは決して表現できない“感動”である。あえて喩えるならば、心が春の土のように柔かく耕された感覚、とでもいうのだろうか。硬く踏み固められていた土が、冷たく光る鋤を突き立てられながらも、ほくほくと掘り返されていく。冷たい、が温かい、を創る、そんな不思議な感覚でもある。

とりわけ、ラストシーン、マーラーの交響曲第5番第4楽章の調べに乗せられて展開する井関佐和子のモノローグ(踊り)には胸を衝かれた。

この場面は金森様がNDTIIに所属していた若冠20歳の時に振り付け、同カンパニーで初演した『Under the marron tree』が基になっている。日本でも過去には氏が主催した公演no・mad・ic project、今年初頭の「青山バレエフェスティバル-Last Show」でも井関がソロで踊っている。特に青山バレエフェスティバルでの井関の表現からは本当に愛が心にぼっかりと大きな空洞を空けているのが痛いほどに伝わり、涙が止まらなかった。会場からも鼻をすする音がたくさんしたから、恐らく同じように心を締め付けられた人は多かったのだろう。

振付家としての初期の作品、プライベートユニットから生れた作品、を融合

『愛と精霊の家』は、振付・演出を手掛けた金森様の、愛と死へのまなざしが見事に凝縮された作品である。ヨーロッパから東京、そして新潟へと創作の場を移し、特に新潟でNoismを立ち上げてからは“数字”という責任も背負わざるを得なかったはずである。それでも金森は、振付家として誠実に、今の時代と、普遍的に人の心をとらえて離さない世界に、真正面から対峙しようと努めてきた。その視線の先にあるものはいつも“愛”と“死”であった。

『愛と精霊の家』の基になっているのは井関と金森のプライベートユニット、“ユニットシアン”で2012年、高知で初演した『シアンの家』と、『Under the marron tree』である。ふたつを合体させ新たな作品として再構築した今回の作品では、井関が演じる女性をとりまく男性陣に、Noism1での活躍を経て現在Noism2の専属振付家である山田勇気、Noism1ゲストメンバーとして活躍した小尻健太、俳優の奥野晃士、そして金森様の4人。徐々に舞台上での金森様を観られるということ、首都圏はおろか新潟でも上演されたことのない『シアンの家』の改訂版であること、スペシャルゲストを迎えての新演出であること、しかもたった1日の公演だけに期待と注目は高まり、チケットは完売。会場時間前から多くの観客がロビーに集まり、客席内に入るとそこは静かな熱気で埋め尽くされていた。

久しぶりに井関らと踊る山田、久しぶりに新潟でNoismのメンバーと踊る小尻、そして久しぶりに舞台上立つ金森、というめったにない顔合わせに、奥野の語りが深みを添えた円熟味のある舞台。70分の上演時間の間、舞踊家たちの一挙手一投足から発せられるメッセージから目が離せず、自分が呼吸していることすら忘れて引き込まれた。

終演後のアフタートークにも多くの人が残り(ほぼ8割は残ったと思う)、すべてが終了した後ロビーに散らばった人々の身体からは余熱のようなものもわもわと発せられていた。他県から足を伸ばし鑑賞していた方々も多かったと見え、帰りの列車の時刻に合わせアフタートークが盛り上がっているにも関わらず席を立たねばならなかった人も見られた(ちなみに私の友人もその一人であった)。

「0」が意味するものとは？

受け取り方は、個人個人のパーソナリティと積み重ねてきた時間によってさまざまだと思う。けれども、誰もが愛について深く洞察しないわけにはいかない、貴重なひとときとなったことだけは間違いないだろう。

自分自身と向き合い、自分の心の中から言葉を紡ぎ出す方法は他にもいろいろある。しかし、舞踊と言うものにはその可能性が多にあるということ、そうしたひとりひとりの貴重な時間のために、舞踊家たちは心身を研ぎ澄ませるべく日々研鑽を積んでいるのだと、感慨深く思わずにはいられなかった。

メインカンパニーであるNoism1、セカンドカンパニーであり研修生らが参加するNoism2、そして今回の公演ではNoismを牽引する立場にある二人と卒業生とがタッグを組み「0」となった。

発足当時、金森様が“主義を持たない主義、だからノイズム、No-ism”というようなことを語っていたことを思いだす。

主義を持たない主義は新陳代謝を重ねながら、重ねた月日を確実に成熟へと向かわせている。

文：浦野芳子

NIDF2015 - 新潟インターナショナルダンスフェスティバル

2015.8.21- 9.4 りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館〈劇場〉



Photo by Isamu Murai



Photo by Isamu Murai



Photo by Kishin Shinoyama

日中韓文化交流を目的とする「東アジア文化都市2015新潟市」の一環として、8/21 - 9/4、アーティストックディレクターに金森様を擁し、新潟で初めて国際舞踊祭が開催された。共に各国で初めて設立されたプロのコンテンポラリーダンスカンパニーで初来日の、韓国・大邱市立舞踊団(DCMD)と中国・城市当代舞踊団(CCDC)を迎え、日本からはNoismの新たなプロジェクトカンパニー Noism0(ノイズムゼロ)が発足、新作「愛と精霊の家」(「水と土の芸術祭2015」参加作品)が上演された。また各舞踊団の芸術監督3名による文化鼎談も行われ、様々な文化情勢や劇場文化政策の共通課題などが本音で話し合われ、意義深い交流事業となった。

- 1 大邱市立舞踊団(DCMD) 新作「I Saw the Elephant」より第2部(8/21)
- 2 城市当代舞踊団(CCDC)「As If To Nothing」(8/28)
- 3 Noism0「愛と精霊の家」(9/4)

新潟市「水と土の芸術祭2015」Noism1メンバー振付公演

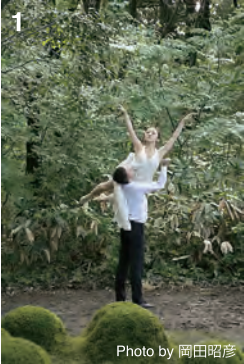


Photo by 岡田昭彦



Photo by 中村脩



Photo by 岡田昭彦



Photo by 中村脩



Photo by 中村脩

新潟市内の自然豊かな各会場で、芸術祭の展示作品と共に踊るメンバー振付公演が開催された。野外なので天候に恵まれない時もあったが、たくさん観客が見ごたえのある公演を堪能した。

- 1 真下恵 演出振付作品『ひこばえ』 8/29(土) 15:00
会場：前田哲明「Untitled 09-01」@秋葉公園
出演：中川賢、田中須和子
衣裳：金子ともみ
- 2 池ヶ谷奏 演出振付作品「私の居場所(おうち)」 8/29(土) 18:00
会場：南川祐輝「おひるねハウス」@西海岸公園
出演：真下恵、石原悠子、浅海佑加、鳥羽純美、山下菜奈
衣裳：佐藤悠人(Utopia)
- 3 吉崎裕哉 演出振付作品「T」[HERE] 8/30(日) 15:00
会場：藤野高志/生物建築舎「曲」@上堰潟
出演：チェン・リンイ、石原悠子、池ヶ谷奏、梶田留以、佐藤琢哉、上田尚弘
高木真慈、鳥羽純美、深井響子
衣裳：梶田留以
- 4 チェン・リンイ 演出振付作品「AFTER THE OTHERS」 9/5(土) 17:30
会場：ジャウマ・ブレンサ「THE HEART OF TREES」@信濃川やすらぎ堤
出演：吉崎裕哉、梶田留以、田中須和子、飯田利奈子、山下菜奈
衣裳協力：山田志麻
- 5 中川賢 演出振付作品「シン村の掟」 9/6(日) 17:30
会場：関根哲男「原生一立つ土」@佐潟
出演：真下恵、角田レナ、仁、石原悠子、吉崎裕哉、上田尚弘
浅海佑加、西岡ひなの
衣裳協力：山田志麻